

「I」のソニーの結婚式。左からソニーはダブル父はノットトラベル、マイケルは軍服、フレドはピークトラベルとローマスタイルが各人各様



「II」のワンシーン。小柄なマイケルに威厳と貫禄と色気を与えるスーツは、あたかも雄クジャクが羽根を広げて威嚇と同時に誘惑するような印象だ



（写真右「II」でフレド（左）が着るリゾートスタイルのパーティーウェアは50年代の流行（同下）「III」のワインセント（左）とマイケル。カラーシャツとダークスーツを同系色で合わせるの80年代の流行。衣装デザイナーはミネリーナ・カネロロ。写真はすべてゲッティ

The Godfather

スーツの歴史絵巻

映画「ゴッドファーザー」が1972年に公開されて50年経った。その後公開された「PART II」「PART III」も含めて、20世紀アメリカの「もうひとつの歴史」をイタリア移民の視点から描く3部作は、同時に、20世紀のメンズファッション史の一大絵巻にもなっている。

1901年から80年代までの流行を描くだけでなく、キャラクターが立場や状況によって着分けるスーツのパリエーションが豊富だ。72年公開の「I」、74年公開の「II」、そして90年公開の「III」の衣装デザイナーは異なるが、それぞれが徹底した時代考証とキャラクター分析に基づいてオリジナルなスーツを作っている。

各時代のスーツは、今見ても「クラシック」として魅力が失っておらず、スーツに対する新たな関心をも喚起する。実際、ニューヨーク最大の「組織」コルレオーネ・ファミリアの二代目、マイケル・コルレオーネを演じた身長約167センチのアル・パチーノに威厳と迫力を与える40〜50年代スーツに対する憧れは、現代日本においても根強い。あるテラーは「マイケルのようなダークスリーピース」を注文するお客様が常に一定数いる、と語る。

また、20世紀前半の米国に着想を得たメンズファッションを現代的な解釈で作るブランド「アジャスタブル・コスチューム」は世界中から「ゴッドファーザー」に着想を得たスーツや小物の注文を受けている。同ブランドはマイケルが「II」で着るシルクシャントンのスーツを現代風に再解釈したスーツを出したところ、70万円超の高価格にもかかわらず、すぐに2着売れたという。身長の高くないアンチヒーローを永遠のスーツアイコンにしたという意味でも、映画発の新たなスーツトレンドを生み出しているという点でも、この映画はクラシックなメンズスタイルのカタログとしても稀有な存在感を發揮している。

マイケルのようにスーツを着たいという願望が生まれるのは、マイケルへの共感が深いからでもある。

シリースのなかでもとりわけ「I」は、マイケルという一人の人間の成長物語として神話的なニュアンスを帯びている。家業を継ぐ気などなかった海軍帰還兵としての初々しい青年期から、父を守ろうとする過程で否応なく成長していく。大人の男性への通過儀礼を経て闇の世界に不本意にも巻き込まれ、ファミリアの長として覚醒し、苦

渋の決断を重ねて貫禄ある「ゴッドファーザー」の地位に就くまでの「心の旅」には、古今東西の物語の主人公に通じる普遍性がある。

ちなみに、「II」は若かりし頃のマイケルの父、ヴィトーが力を手に浮上する様を、「III」は絶大な権力を握ったマイケルが孤独と苦悩を深めていく晩年を描きました。

アンチヒーローの心の旅を、雄弁に語るのが衣装である。「I」の最初のシーンで、マイケルは勳章をつけた海軍の制服姿で米国の英雄として登場する。選ぶスーツはボタンダウンシャツのアイビリーグスタイルだ。それが、シチリアでの隠遁カジュアルから葬儀ルックを経て、クジャクの雄のようなダークスリーピースとホンブルグハットの盛装で周囲を威圧するまでに化ける。最後は「この場のボス」であることを示す、上着を脱いだサスペンダーズスタイルで、マイケルのゴッドファーザーへの道が完結する。

スーツは他の人物の性格も精妙に伝える。血の気の多い兄ソニーは、プリンス・オブ・ウェールズ・チェック柄のダブルスーツを華やかに。妹の結婚式で着るタキシードもダブルである。直情型で派手好きな気質を表すスーツは、後

の災いの予兆とも見えてくる。

ファミリア・ビジネスには向かない心優しい次兄のフレドは、開襟シャツの襟を上着の外に出すリゾート風味を取り入れた着こなしを見せることが多い。「II」でも当時流行のカラフルな格子柄の上着をパーティースタイルとして着用。トレンドへの敏感さが、家業には向かない彼の浮薄な資質として描かれているのだ。妹ソニーの夫カルロも、仕事を与えられない不満とプライドをもてあましていることがわかる原色のスーツで自己顕示する。

「II」「III」においてもスーツは物語に深い意味を与える。「II」のヴィトーが移民労働者からのほりつめ、父の復讐をするときに着る「リベンジスーツ」（写真右側中央）は、下襟が大きく丸みを帯びたシチリア風のスーツ。アメリカの移民社会で同郷のテラーに作らせたものであると示唆する。また、「III」で登場するマイケルの甥、ヴィンセントはダークカラーシャツをダークスーツに合わせる80年代特有のスタイルで暗躍し、マイケルとは異なる次世代の感覚を表現する。

この映画のスーツの魅力が色あせない理由のひとつは、マフィアやギャングが着るスーツだから、かもしれない。現実の米国史においても、マフィアのスーツアイコンは何人かいる。アル・カポネやジョン・ゴッティは「タイム」の表紙にもなった。闇の仕事に隠し、表社会では成功したビジネスマンのように振る舞う必要があったので、ともすると装いが完璧以上に洗練されるのだ。影や緊張感、暴力性を隠したスーツやコート、の迫力や色気は、清潔感あふれる正しいビジネススタイルではなかなかな漂わせることはできない。

壮大な3部作の虚構のなかで展開するドラマティックなスーツの盛観が、もはやスーツそのものがマイナーになりゆく21世紀のスーツ市場を活性化させる一つのきっかけになっているのは、なんと皮肉な幸運である。

服飾史家 中野香織



「II」の食卓を囲むシーン。コルレオーネ3兄弟や妹の夫、ファミリーの弁護士、幹部。異なるスーツスタイルがそれぞれの性格と立場を表す

（写真上）マロン・ブランドが演じる

ヴィトー・コルレオーネ。「I」の衣装デザイナーはアンナ・ヒル・ジョンストン

（同左）「II」で20世紀初頭の若き日のヴィトーをロバート・テニードが演じた。

「II」の衣装デザイナーは、セオドア・ヴァン・ランクル